

日曜聖書講筵（婦選会館 公開集会）

聖霊をけがす罪

——マルコ伝第3章20～30節——

1964年7月5日

小池辰雄

聖霊に逆らう罪 聖霊に対する罪 御霊の裏付け サタンの罪 天衣無縫的な全さ 本当の担い 聖霊の中に在る 聖霊の中に十字架によって入れられる

【マルコ3・20～30】（私訳）

イエスが家にはいると、²⁰群衆がまた集まってきたので、一同はパンを食べることもできないほどであった。²¹身内の人たちはこの事を聞いて、イエスを押さえにやってきた。彼が気が狂ったと思ったからである。²²また、エルサレムから下ってきた教法学者たちも、「彼はベルゼブルにとりつかれている」と言い、「悪霊どものかしらによって、悪霊どもを追い出しているのだ」とも言った。²³そこでイエスは彼らを呼び寄せ、^{たとえ}譬をもって言った、「どうして、サタンがサタンを追い出すことができるか。²⁴もし国が内輪で分かれ争ったら、その国は立っていかない。²⁵また、もし家が内輪で分かれ争うなら、その家は立っていかないであろう。²⁶もしサタンが内側で対立し争うならば、彼は立っていけず、滅びてしまう。²⁷だれでも、まず強い人を縛りあげなければ、その人の家に入って家財を奪い取ることはできない。縛ってから始めて、その家を略奪することができる。²⁸よくよく言うておくが、人の子らには、その犯すすべての罪も神をけがす言葉もゆるされる。²⁹しかし、聖霊をけがす者は、いつまでもゆるされず、永遠の罪に定められる。³⁰そう言われたのは、彼らが「イエスはけがれた霊につかれた」と言っていたからである。

●聖霊に逆らう罪

並行の記事としては、マタイ伝12章28節から32節、ルカ伝8章3節あたりのところですが、聖霊をけがす、あるいは、聖霊に逆らう罪。これはゆるされない、唯だ一つの例外である。キリストの十字架の贖罪すらも、これを例外とするような角度で言われているわけです。それで、昔からいろいろ、註解で苦しむわけです。

「一体、どうしたものだろう」

というようなわけで、いろいろ説が上がっていますが、それを今ここに紹介することは省



きます。

マタイ伝の方だと、12章31節に、

「³¹この故に汝らに告ぐ、人の凡ての罪と^{けがし}瀆とは赦されん、されど御霊を瀆することは赦されじ。³²誰にても言をもて人の子に逆う者は赦されん、然れど言をもて聖霊に逆う者は、この世にても後の世にても赦されじ。」（マタイ12・31～32）

これがマタイ伝の御言です。マルコ伝の方は、

「²⁸誠に汝らに告ぐ、人の子らの

ここのところだけ、マルコ伝だけ「人の子ら」という言い方がありまして、「人の子ら」という言い方は新約聖書でこのマルコ伝のここだけしかないそうです。

凡ての罪と、^{けがし}けがす瀆とは赦されん。²⁹然れど聖霊をけがす者は、永遠に赦されず、永遠の罪に定めらるべし』（マルコ3・28～29）

とある。「人の子ら」というのは「人々」というのと同じことなので、マルコ伝のこの言い方はアラミ語式な、ヘブライ語式な言い方であつて、それをギリシャ語でそのまま持ってきたので、ギリシャ語の普通の言い方ではないわけです。そういう意味においては、むしろマルコ伝のこの「人の子ら」という言い方が、もとのキリストのアラミ語をそのまま直訳したと見るのが、私は自然ではないかと思っています。「人」でも「人の子ら」でも結局、「人間」ということです。人間の対人間に対する、またある意味においては、神に対してすらも——しかし、すべての罪は根源的には神に対する罪です——それは赦されるけれども、また、マタイ伝によると、

「人の子に逆らう者は赦されん」

と言うので、「人の子」というのは明らかにキリストのことで、

「然れど言をもて聖霊に逆う者は、この世にても後の世にても赦されじ」

という。さあ、これはどういうことだろうか、と言つて困るわけです。

「キリストに逆らうのと、聖霊に逆らうのと、どう違うのか」

と。いろいろ論理的にこれを整合しようとする、なかなか困るわけです。ただこの場所の言葉だけに囚われると、全部これを論理的に整理することが難しくなるような感じがします。しかし、イエスはこの言葉を一体、どういう場において語られたかという、現実をよく見ることが大事です。

●聖霊に対する罪

マタイ伝によりますと、12章27節のところに、

「²⁷我もしベルゼブルによりて悪鬼を逐い出さば、汝らの子は誰によりて之を逐い出すか。この故に彼らは汝らの審判人となるべし。²⁸然れど我もし神の



霊によりて悪鬼を逐い出さば、神の国は既に汝らに到れるなり。」（マタイ12・

27、28）

とある。霊界は、善霊と悪霊がありまして、いろいろな霊がいるわけです。

「神の霊によつて悪しき霊どもを追ひ出せば、神の国は汝らに来る」

と。マルコ伝の方でさつき読みましたように、身内の者たちが、キリストが気が違ったと思つて、これを取り押さえようとしてやつて来た。「身内」というのが一体、どの範囲だか分かりません。けれども、血族的な意味において、キリストの一番近いご連中です。イエスが既に、自分は故里においては受け入れられないで、

「預言者は故里に入れられない」

と言つて、ナザレを出て来られた。キリストの言つたりしたりすることが桁はずれで、ちよつと普通の常識で理解できない言葉を吐き、また桁違いなことをなさるものですから、「どうもこれはおかしい。今までのユダヤ教と少し角度が違ふし、律法は破るし、

どうもこれは少し悪鬼に近いようなことではないか」

というような、とんでもない疑いを始めたわけです。

マルコ伝3章28節の「誠に汝らに告ぐ」の「汝ら」という相手は、そういった身内も多少あつたでしょうが、主としてパリサイ人たちです。キリストを何とかしてやつつけてしまおうと思つて、狙つているのはこのパリサイ人たちである。そういう相手に向かつて、キリストは特に

「聖霊をけがす者は」

と言われた。

モーセの十誡の、あるいは山上の垂訓のキリストの言葉を守れずにあるのが我々罪びとである。それは、しかしながら、どの罪も赦される。けれども、あそこに上がつてない罪がある。それは即ち、ここにキリストが特に上げられたところの、聖霊に対するところの罪です。なるほど、十誡にもなければ、山上の垂訓にも、聖霊に対する罪というのはないようです。それで、これだけはちよつと種類が違ふというわけです。

たとえば、サウロ（後のパウロ）は、

「汝、殺すなかれ」

というあの十誡の一番重いやつを實際、彼は殺人罪を問われても仕方がない事態を既に醸していた。それは、一つの例としては、ステパノの殉教の時に現れてくるわけです。使徒行伝7章のところを見ますと、ステパノはイスラエルの歴史を滔々と述べてきて、51節、

「51項強くして心と耳とに割礼なき者よ、汝らは常に聖霊に逆らう、その先祖のごとく汝らも然り。52汝らの先祖たちは預言者のうちの誰をか迫害せ

ざりし。彼らは義人の来るを預じめ告げし者を殺し、汝らは今この義人を売り、

「この義人」というのはキリストのことです。



かつ殺す者となれり。⁵³ なんじら、御使たちの伝えし律法を受けて、尚これを守らざりき』

⁵⁴ 人々これらの言を聞きて心、怒に満ち切齒^{はがみ}しつつステパノに向かう。⁵⁵ ステパノは聖霊にて満ち、天に目を注ぎ、神の栄光およびイエスの神の右に立ちたもうを見て言う、⁵⁶ 『視よ、われ天開けて人の子の、神の右に立ち給うを見る』⁵⁷ ここに彼ら大声に叫びつつ耳を掩^{おお}い心を一つにして駆け寄り、⁵⁸ ステパノを町より逐^おいだし、石にて撃てり。証人らその衣をサウロという若者の足下^{あしもと}に置きり。⁵⁹ 斯くて彼等がステパノを石にて撃てるとき、ステパノ呼びて言う『主イエスよ、我が霊を受けたまえ』⁶⁰ また跪^{ひざま}ずきて大声に『主よ、この罪を彼らに負わせ給うな』と呼ばわる。斯く言いて眠^{ねむり}に就けり。』（使徒行伝7・51～60）

ステパノは選びの器として、聖霊の選びの器として、

「ステパノは神の恩恵^{めぐみ}と聖霊の能力^{ちから}に満ち」

ということが6章8節に書いてあります。

「信仰と聖霊にて満ちたるステパノ」

ということが6章5節にも書いてあります。このステパノが一番、演説の中心に置いたものは何かというと、この聖霊に逆らうところの事態です。この聖霊に満ちたステパノを石にて殺した張本人の一人であるのがこのパウロです。

●御霊の裏付け

聖霊という事態は、私は無教会に育ちまして、聖書が語っているごとく厳かに、どうもあまり承つてこなかったように思います。もちろん、先生方は聖霊のことを十分御存知で、自覚もしていらっしゃると思いますが。私は先生方のことを言うのではない。無教会の歴史において、客観的に言いまして、この聖霊のことが、無教会に限らず教会といえども、聖書が語っているその次元、その質に本当に迫って行こうということにおいて、どうも欠陥があるように思われる。

ある時から、私は祈りの世界でこの聖霊の恩寵の力の中に捕らえられてきた。それから、聖書は本当に、聖書の味が変わってきました。今までは、讃美歌を歌いまして、あるいは聖書を読みまして、或る感情的な、或る理性的な面の把握がむしろ中心であった。魂の奥底からの把握といった面で確かに欠けていたことは、今思い出しても、明らかにそのことは言えるのです。

聖書は実に御霊によつて書かれた書である。御霊の裏付けを持った神の言である。そのことが、いよいよはつきりして参りました。読むと力がくる。これはもう正直、そうなつて来た。聖書を読むと力が来る。聖書を読んで力がくるということは、聖霊が魂を貫いて



なければ、生じてこないんです。その御霊の力によって祈りますと、今まで知らなかったことが起きたり、また、先が示されたりということですよ。或る人々が私のような者を通して、魂がまた肉体も、幾人も救われていった。そのことに對して私は非常な批判を受けたけれども、どうありましても、私はキリストに祈った。他の霊に祈ったのではない。福音書において展開し、使徒たちを通して展開なさったところの、このキリストの霊に祈った。正直、そうです。

●サタンの罪

いわんや神の子キリストの神の業に對するところの批判は、

「悪鬼の親玉でもって悪鬼を追いつたのだらう」

とは、とんでもない話です。

「そんな馬鹿なことがあるか」

と言つて、キリストが反撃しておられる。神の霊、聖霊によつてキリストがそこに神の国を現じている。

「神の国は既に汝らに至れり」

とマタイ伝の方に書いてあるように。神の恩寵の事態、これは聖霊の働きにおいて出てくる。それに対して瀆し^{けが}ごとを言う。これはどうしたつて、赦される訳はない。それは審かれる。それはサタンを打ち給うところのキリストです。即ち、聖霊に逆らう罪というのは、それ事態がサタンのものである。それ事態がサタンの罪である。そのことは、ベンゲル（ヨハン・アルブレヒト・ベンゲル 1687～1752）の註解を見ましたら、ベンゲルが実に簡潔な言葉で書いておりますので、ちよつとご紹介しておきます。

「諸々の罪は人間的である。しかしながら、聖霊に對する瀆し^{けが}ごとはサタンの罪である。」

と。ベンゲルという人は非常に簡潔な註解を書いています、非常に寸鉄よく心に当たるような言葉がしばしば出ております。諸々の罪は人間的なものであるけれども、聖霊におけるところの瀆し^{けが}ごとはサタンの罪なものである。

「瀆す」という字は「ブラスフェーメオー」というギリシャ語ですが、「害^{そこ}う、謗^{そし}る」とか、もうひとつ別な言葉でいうと、サタンのな角度から「批判することです。こういうことを言つたのはパリサイ人である。パリサイ人というのは元来、立派^{ふるつわもの}なんです。

「俺たちは信仰のチャンピオンである。古強者^{ふるつわもの}である。律法には詳しい。普段の生活は立派である」

と。ルカ伝18章に書いてあるように、

「私はこれこれの罪を犯しません」

と言つて感謝している。片一方の取税人は胸を打つて首^{こうべ}すら上げることができない。



「このどうにもならない者を哀れんでください」と祈っている。キリストは、

「この取税人が義とされて、いかにも立派そうな祈りをしているのが逆に救われぬ」

と言われた。

「このどうにもならない者は」

と言って平伏すのではなく、

「俺こそはこうに立派である」

と自ら自認して、しかも、神の事態に対して

「それはサタンだ」

と言って、自分がサタンに囚われている。傲慢なサタンに囚われているのに、神の事態を瀆している。これはどうにもならないんです。サタンのものは赦されない。自己義認で人を審いている人は、これは知らないまにサタンの的になっている。キリストの敵は、キリストがマタイ伝23章で畳みかけて

「禍害なるかな、偽善なる学者、パリサイ人よ」

と言って攻撃されたのがみなその類です。霊的な傲慢というのが一番恐ろしい罪です。これはルターが「マリアの讃歌」の中でもそのことを強調しています。キリストに対して霊的な傲慢さをもって、自分たちがサタンに囚われているのに、サタンの傲慢に囚われているのに、それに気がつかず、相手をどうのこうのと批判する。

私は、私たちのこの御霊の事態に対していろいろ批判されてきた。もちろん、我々の中にも欠陥もあるでしょう。けれども、それは本当にお気の毒である。相手を、私はサタンとは思いません。みな立派な方々です。けれども、うっかりすると、

「私たちの信仰は正統である」

という、口にくそ言わないけれども、そういった角度が増えてくる。

●天衣無縫的な全さ

私たちの願いは——「私は既に取りました」とは、パウロと共に言わない。

「我既に得たりと言わず、常にこれを追い求めてやまず」

と言う。

「キリストに掴まれ、聖霊に掴まれてやまず」

と言って、生命を賭けて進んでいくことです。

私はこの前、深山幽谷に行つて、本当に何ともいえない境地に入れられて帰ってきました。この「聖霊をけがす罪」というサタンの事態に対しては、イエス・キリストの僕として、どこまでも聖霊の前に平伏しを持ち、また聖霊における権威を持つて、いよいよ進んで行



きたいと、こう志を固めて帰ってきました。

どうか、皆さん、この福音は、本当に皆さんは使命づけられているということを、もはや頭ではなくして全存在をもって、証し人たるの自覚をいよいよ深くしていただきたい。人間ですから、従来のいろいろなガラクタなんかもあるでしょう。そんなものは心配いらない。この御霊の力をもって、この光の世界から、内側からどしどし新しくされて進んで行く。どう思われてもいい。旧き我は我にあらず。常に新たに、あなた方はどしどしこの満月に向かって、既に内側にこの完全性をいただいて進んでいく。御霊は完全なるものですから。

「これこれの徳を積んで完全になる」

なんて、そんなことは絶対にできない。御霊というこの全きもの^{まった}によつて天衣無縫的な全さが内側から湧いてくる。

● 本当の担い

聖霊に逆らっている罪というものは、正に一切の自己義認であり、また諸々の批判をなすに在り方です。その批判によつて神はまた、その人を批判したもう。本当の担いというならば、あなた方一人ひとりが、この幕屋を本当に自分の肩に背負っているという――

「あの人がどうだ、この人がどうだ」

ではない――本当に御霊の力でもつて一人ひとりが背負っていくときに、なんとこの幕屋は素晴らしいことになるだろうか。この集会は素晴らしいことになる。ただそこだけです。ステパノは石に撃たれながら、彼は敵を全部背負っていたから、

「彼らの罪を赦してやってください」

と言った。

「汝らは聖霊に逆らう」

とはつきり言ったステパノは、

「彼らをどうか赦してやってくれ」

と。どうですか。それすらもなお救わんとして、悲願霊願をもって彼は言った。

「あいつらは聖霊に逆らっているから、救われない」

と言うのでは、その人がまた聖霊に逆らう。キリストは、

「汝らを責むる者のために祈れ」

と言われた。そういうわけでありまして、どう考えても、私のない世界です。私心のない世界。私心のないところに本当の光が来る。慈光が輝く。

「ああ、あの人たちは可哀相だ。しかし、どうか聖霊に逆らわないように、神さま、

どうか本当に砕いてやってください」

と執りなす。神さまの砕きです。我々が批判していいこうではない。神さまが砕き給う。口



―マ書8章に、

「聖霊言いがたき呻きをもて執成したもう」

とある。そういうような聖霊の事態です。いよいよもって私たちは平伏しの姿で、また本当の担いの姿でいく。

●聖霊の中に在る

「聖霊に逆らう」

ことの反対は、

「聖霊の中に在る」

ことです。聖霊の中にある。この反対を、皆さん、考えてください。

「聖霊に逆らう罪は恐ろしいな」

なんて、恐がつたつてダメです。聖霊の中に入る。その時は、すべての罪は逆に今度は征服されていく。そのことを私は言いたい。消極的なことをここで学ぶのではない。正直、人間というものはみんないろいろな癖があつたり、しょうがないですよ、これも。けれども、この聖霊の中に私たちが入って行つたときに、それにだんだん勝つていける。突破できるから。これがないときには、どんなにそれが或るところまで良きそうに見えても、また人には立派そうに見えても、実は魂は窒息している。

魂がその部屋の窓を開けば、無限の空気が有限の部屋の中に来ているじゃないですか。部屋の空気は有限なりと思う人は間違いです。この部屋の空気は有限の中に無限を宿している。そのように、私たちはこの胸三寸の中に、無限の限り無き聖霊が、自由自在に湧きて流れる泉のごとく宿る。

上高地の焼岳という所は噴煙している。その麓には熱泉が湧いている。谷川の水は、手を入れれば一分と入れていられないくらいに冷たい。片一方では熱泉が湧いているかと思えば、谷川の水は実に素晴らしい透明さをもつて――ギデオンのあの「三百」のごとく私もそれを飲んできた――透明な、流れてもなお尽きないところの清流であり、また湧きて尽きないところの熱泉である。温泉くらいの話ではない。

これは、聖霊をうちに宿すときに、私たちは本当に霊的变化を起こす。こないだも申しましたが、この霊的人格にならなければダメです。もう十日位あとに、7月の半ばに清里で集会をする。みな、霊的人格となつて山をくだつてもらいたい。

ヨハネ伝9章を見ますと、生まれながらの盲人が救われているところが出ています。ヨハネ伝9章というのは非常に大事なところです。盲人は治されてから、何と言ったかというところ、

「³³かの人もし神より出でずば、何事をも為し得ざらん」³⁴かれら答えて『な

んじ全く罪のうちに生れながら、我らを教うるか』³⁵と云いて、遂に彼を追い出せり。³⁵イエスその追い出されしことを聞き、彼に逢いて言い給う『なん



じ人の子を信するか』³⁶答えて言う『主よ、それは誰なるか、われ信ぜまほし』³⁷イエス言い給う『なんじ彼を見たり、汝と語る者はそれなり』³⁸爰に、かれ『主よ、我は信ず』といいて拝せり。³⁹イエス言い給う『われ審判の為にこの世に來れり。見えぬ人は見え、見ゆる人は盲目とならん為なり』⁴⁰パリサイ人の中イエスと共に居りし者、これを聞きて言う『我らも盲目なるか』⁴¹イエス言い給う『もし盲目なりしならば、罪なかりしならん、然れど見ゆと言う汝らの罪は遺れり』(ヨハネ9・33～41)

と。イエスは、

「見ゆと言う汝らの罪は遺れり」

と言われた。

「俺たちは目が見えている。俺たちは耳が聞こえている。俺たちはよくものの真相が見える。よく分かっている」

なんて思っている、どつこいというわけです。それが即ちパリサイなんです。却って、それが霊盲である。イエスは、その御業また御言においてまるで別な判断をしておられる。

「聖霊の中に」ということは、砕けの魂、平伏しの魂でなければ、絶対に「聖霊の中に」ということはないんです。思い上がったら、聖霊と思っていたらどつこい、そのうちにサタンが住み込んでしまう。

「あらあら、これは聖霊ではない」

ということになってしまう。そういう、名刀みたいなものだ。名刀以上ですからね、聖霊というの。うっかりすると、自分を切ってしまう。本当に八方破れになっていなくては。その点ではむしろ、私は昔の坊さんたちの心境が非常に慕わしい。

「ああそうか」

と、何でもこちらが引き受けてしまう。本当に呑んでしまう。そして、仏の恵みの光でそれを溶かしてしまう。変質変貌させてしまうような、そういう存在です。

●聖霊の中に十字架によって入れられる

「我は潔し」

として自ら澄ますことではないんです。

「私はすべてのことが分かった」

と言って、思い上がることではない。どこまでも、

「自分は何もできません。何も言えません」

と。また、

「『この無為なる僕は、ただ為せと言うことをしただけです』と言え」とキリストは言われた。



こういう事態は説明できない。説明しようすると、別な面が何かつかかるように、それは説明できない。同時に全体を言うことがもし可能ならできるけれども、片一方を言っている、もう片一方が見えなくなってしまう。そういう世界です。これはもはや説明で分かる世界ではなくして、どこまでも身につける世界です。「ははあ」と、全く一回限り、その場限り、その時限りでもって、それが進んで行く。そして、全体が驚くべき有機体をなしている、生命体をなしている。そういうわけです。

このキリストの砕けとか平伏しとか言うのは、極まったところは十字架です。既に十字架されている。常に十字架されている。十字架されているところにこそ、聖霊は宿り給う。言葉の最も深い意味において、十字架されている現実、そこにこそ聖霊は宿り給う。

かくして、私たちはこの表題の奥の世界に——聖霊をけがす罪を懼れるのではなく——聖霊の中に十字架によって入れられる世界にいよいよ入る。また、ただ一つ赦されない罪があるということは、いかに人間がキリストを十字架に架けなくてはならなかったかということの、反対の証明なんです。実は、私たちはみな、本質的に聖霊をけがす罪を犯している。ゆるされない。赦されない者をキリストは、その十字架でもって担ってしまっている。

だから、聖霊に逆らうということは、十字架を無視するということになる。十字架を無視したらおしまいだ。それは傲慢になる。恩寵を受けとらないで、

「おれは大丈夫だ」

と。そして、神に逆らっていれば、それは赦されない。

「十字架が分かりません。どうも、キリストは分かりません」

と。いいです、分からないなら。しかし、

「なんだあ？ 十字架は」

なんてなことになったら、こいつは危ない。分からない人はいいです。その「分からない」というのは、それは正直なんです。けれども、

「贖罪なんてものはあるかあ」

というようなことになってきたら、それは聖霊に逆らう。パリサイ的になる。傍若無神となりましたら、大敵です。

私たちは、この御霊の福音の十字架・聖霊のことはどこまでも深く受けとりながら、御霊の霊的な人物となつて、サタン的なものに対して真の担いの闘いをしていく。相手を救い上げていくステパノの殉教の死というのは何と素晴らしいか。時間もきましたので、その辺にしておきます。

